

日本におけるキリスト教の歩み

その3 徳川禁教令・弾圧-2

江戸

時代

家康の後を継承した秀忠は、自身の命を早速打ち出した。先ず、キリシタン摘発手段として「五人組の制度」を計画。長崎奉行長谷川左兵衛に代わり甥の権六が任命。彼の下で代官の座を巡りキリスト者の二人が争う。その後二人は棄教し、迫害する側となった。一人は神父をかくまった罪で処刑。かつて栄えた大村では、棄教した純頼が、潜伏している宣教師らを次々処刑した。大村の迫害は、豊前から小倉、中津へと広がった。1618年、江戸から長崎に戻った長谷川権六は、宣教師狩りを実行。また外国船の港を平戸と長崎に絞り、マカオからの入国を難しくした。その為、セルケイラ司教の後継者ディオゴ神父（イエズス会）は任命されるも入国できず、マカオから日本の歩みを見守った。

1619年長崎西坂の丘は、火あぶりの刑で大勢のキリスト者が殉教した。美しく咲き誇った椿は、殉教者と共に燃え上がる炎と共に消滅した。同じ頃、まだ残存していた教会、病院、施設すべては破壊され、墓地も壊された。また宣教師やキリスト者たちを手助けした者も咎めの罰則が作られた。そして京の都では、理解者の奉行により静かな信仰生活を送っていたが、1619年將軍秀忠の伏見訪問でキリシタンはもとより関係した者全員が処刑。これが**京の大殉教**である。鴨川で火刑51人その中に幼子を抱くテクラと幼子五人の命が捧げられた。その時テクラが最後に残した叫び「主イエスよ、この子たちをお引き受けください」の言葉が残る。苦しむ日本の教会へ教皇パウロ5世は、励ましと恵みの言葉を贈った。それに対してキリシタンたちは書状を認め教皇に送った手紙が、現在もヴァチカンに残る。さてこの頃、マニラから長崎に向かう日本船がイギリス艦隊に捕まった。船内に潜んでいた二人の宣教師は、捕縛され平戸の牢で役人から取り調べの中、すでに牢に捕まっていた宣教師から二人の正体が暴かれ將軍のキリシタン弾圧に一層拍車をかける結果となった。

元和・京の大殉教

1610

長崎大殉教

潜入した宣教師の計画は、失敗に終わった。この事件後將軍秀忠は、長崎奉行の牢にいる宣教師全員を処刑。1622年これが**長崎大殉教**となり26聖人殉教者と同じ西坂の丘で潜伏宣教師たちの殉教の血が重なった。この時の処刑は外国人、日本人、大人、子供関係なく、キリシタンと彼らの関わった全ての人を対象となった。現在、長崎港を見下ろす西坂の丘を世界中の人々が訪れる同じ場所で、大勢の殉教者たちの祈りの声が届いていますか。

~1618

將軍秀忠から家光江戸の大殉教

長崎に近い島原では、まだ宣教活動を黙認されていた一人の宣教師が、八良尾でクリスマスを祝った。その宣教師を命だけでも救おうと日本から追放を計画したが、將軍は処刑を命じ、修道士と共に島原で火あぶりの刑に処した。江戸では、家光が將軍となり全国から大名が集結。將軍家光のキリシタン弾圧の決意は固く、大名の面前でキリシタンを処刑。1623年12月品川の刑場ジョアン原主水他40人**江戸の大殉教**である。厳しい弾圧の時代が始まった。

イエズス会パチエコ管区長・島原